

風水害対策

大雨や強風はわたしたちに何度も大きな災害をもたらしています。ふだんから気象情報に十分注意し、避難の際もみんなで協力しましょう。

注意報

災害のおそれがあるときに発表されます。本書などで避難行動を確認しましょう。

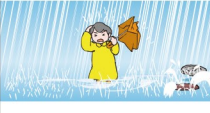
警報

重大な災害のおそれがあるときに発表されます。

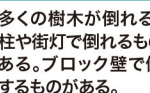
特別警報

数十年に一度の大災害が起きると予想される場合に発表されます。危険な区域から避難できていない方は、命を守るための最善の行動をとりましょう。

雨の強さと降り方

1時間雨量 (mm)	予報用語	人の受けるイメージ	人への影響	屋内 (木造住宅を想定)	屋外の様子	車に乗っていて
10以上 20未満	やや強い雨	ザーザーと降る	地面からの跳ね返りで足元がぬれる	雨の音で話し声が良く聞き取れない	地面一面に水たまりができる	
20以上 30未満	強い雨	どしゃ降り	傘をさしていてもぬれる	寝ている人の半数くらいが雨に気がつく		ワイパーを速くしても見づらい
30以上 50未満	激しい雨	バケツをひっくり返したように降る			道路がリ川のようなになる	高速走行時、車輪と路面の間に水膜が生じブレーキが効かなくなる(ハイドロプレーニング現象)
50以上 80未満	非常に激しい雨	滝のように降る(ゴーゴーと降り続く)	傘は全く役に立たなくなる		水しぶきであたり一面が白っぽくなり、視界が悪くなる	車の運転は危険
80以上	猛烈な雨	息苦しくなるような圧迫感がある恐怖を感じる				

風の強さと吹き方

平均風速(m/s)	おおよその 時速	風の強さ (予報用語)	速さの目安	人への影響	屋外・樹木の様子	走行中の車	建造物の被害	おおよその 瞬間風速(m/s)
10以上 15未満	～50km	やや強い風	一般道路 の自動車	風に向かって歩きにくくなる。 傘がさせない。 	樹木全体が揺れ始める。 電線が揺れ始める。 	道路の吹流しの角度 が水平になり、高速運 転中では横風に流され る感覚を受ける。	樋(とい)が揺れ始める。	20
15以上 20未満	～70km	強い風		風に向かって歩けなくな り、転倒する人も出る。高 所での作業はきわめて危 険。	電線が鳴り始める。 看板やトタン板が外れ始 める。	高速運転中では、横風 に流される感覚が大き くなる。	屋根瓦・屋根葺材がはが れるものがある。雨戸やシャ ッターが揺れる。	
20以上 25未満	～90km	非常に強い風	高速道路 の自動車	何かにつかまっていな いと立ってられない。 飛来物によって負傷する おそれがある。 	細い木の幹が折れたり、 根の張っていない木が倒 れ始める。看板が落下・ 飛散する。 道路標識が傾く。 	通 常 の 速 度 で 運 転 するのが困難になる。	屋根瓦・屋根葺材が飛散 するものがある。固定され ていないプレハブ小屋が移動 、転倒する。 ビニールハウスのフィルム (被覆材)が広範囲に破 れる。	30
25以上 30未満	～110km			屋外での行動はきわめて 危険。			走行中のトラックが横 転する。	
30以上 35未満	～125km	猛烈な風	特急電車		多くの樹木が倒れる。電 柱や街灯で倒れるもの がある。ブロック壁で倒壊 するものがある。 		外装材が広範囲にわた って飛散し、下地材が露 出するものがある。	50
35以上 40未満	～140km						住家で倒壊するものがある。 鉄骨構造物で変形するも のがある。	
40以上	140km～							

台風について

◆熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼びますが、このうち北西太平洋または南シナ海に存在し、なおかつ低気圧域内の最大風速（10 分間平均）がおよそ 17m/s（34 ノット、風力 8）以上のものを「台風」と呼びます。

■台風の大きさと強さ■

◆台風のおおよその勢力を示す目安として、風速（10 分間平均）をもとに台風の「大きさ」と「強さ」を表現します。「大きさ」は強風域（風速 15m/s 以上の風が吹いているか、吹く可能性がある範囲）の半径で、「強さ」は最大風速で区分しています。さらに、風速 25m/s 以上の風が吹いているか、吹く可能性がある範囲を暴風域と呼びます。

■大きさの階級分け■

大きさ	風速15m/s以上の半径
大型（大きい）	500km以上800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上

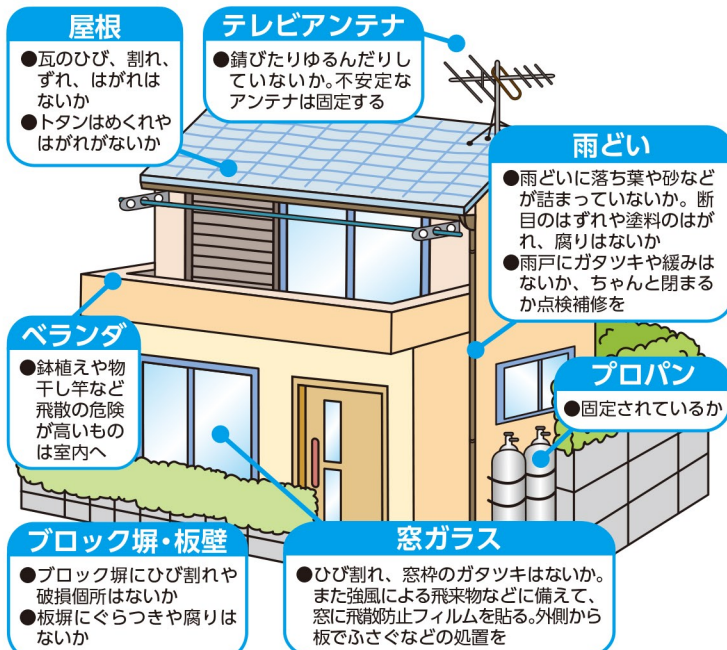
■強さの階級分け■

強さ	最大風速
強い	33m/s以上44m/s未満
非常に強い	44m/s以上54m/s未満
猛烈な	54m/s以上

■台風への備え■

家屋周辺

- 商店などでは看板のぐらつきにも注意
- 庭の鉢植えに注意。室内に入れておく
- 家の周りを一周し、飛ばされそうなものは全て室内に取り込むか固定するなどの飛散防止を



避難の ポイント 危険な 場所



！ 浸水が始まる前に早めの避難を

氾濫水は勢いが強く、大人の膝程度の深さで歩行が困難となります。浸水してから自宅外への避難は危険です。危険を感じたら自主的に避難を開始しましょう。



！ 状況に応じた避難を

周囲の状況が危険で避難場所まで移動できない場合は、自宅や近隣の頑丈な建物のできるだけ高い階に避難しましょう。移動途中であっても、危険を感じたら近隣の建物へ。



！ やむなく浸水の中を歩く際は

裸足、長靴は厳禁。水中で脱げづらい紐靴などが通っています。また、氾濫水は濁っているため、水面下が確認できません。長い棒などを杖替わりとし、側溝やマンホール、障害物に注意しましょう。



！ 川や用水路に近づかない

降雨が続く不安に思っても、川や用水路、田畑の用水は見に行かず、やむを得ない場合は複数人で行動しましょう。避難の途中も増水した川の近くを通るのは避けましょう。



！ 地下室、地下街は危険

地下にいる場合、地上の様子が把握しづらく、避難経路が限定されます。また、地上が冠水すると一気に水が流れこんでくる場合もあり、脱出が困難となります。



！ アンダーパスは危険

道路や線路の下をくぐるアンダーパスや地下道は、洪水の際、真っ先に浸水します。場所を把握し、迂回路を想定しておきましょう。



！ 避難は徒歩で！

車での避難は、緊急車両の通行の妨げになります。また、交通渋滞をまねき、浸水するおそれがあるので、徒歩で避難しましょう。



避難時 8 の心得

ハザードマップ（本書）で避難所の位置や土砂災害警戒区域等を前もって確認しておきましょう。備蓄品もチェックしましょう。

土砂災害は予測が難しく、避難指示の発令が間に合わないこともあります。少しでも危険を感じたら迷わず避難しましょう。

テレビ・ラジオで最新の気象情報に注意しましょう。

避難が必要なときは、キーはつけたまま、ドアロックもしない。車検証などの貴重品を忘れずに持ち出し、徒歩で避難しましょう。

町や消防からの避難の呼びかけに注意し早めに避難しましょう。

高齢者や障がい者など、配慮を要する方の逃げ遅れが無いように協力して助けあいましょう。

避難する前に電気のブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉め、必要なものをまとめておきましょう。

避難が難しい時は、2階以上のできるだけ山から離れた部屋に移動しましょう。

土砂災害対策

土砂災害とは？

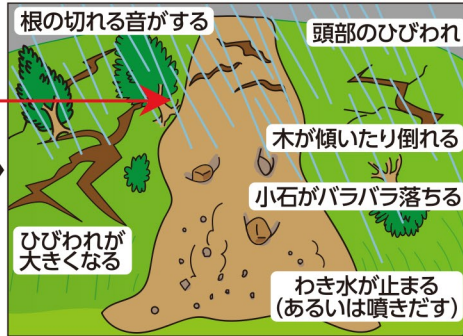
土砂災害は、台風、大雨、地震などにより発生しやすくなります。斜面の地表に近い部分が、雨水の浸透や地震等でゆるみ、突然、崩れ落ちる「がけ崩れ」、斜面の一部あるいは全部が地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する「地すべり」、山腹や川底の石、土砂が長雨や集中豪雨等によって一気に下流へと押し流される「土石流」があります。また、土砂災害が発生する前には、様々な前兆現象が起こる時があります。

土砂災害の前兆・種類

※下記は一般的な前兆現象です。すべての場合において必ず起きるというものではありません。ふだんと違い、少しでも身に危険を感じたら避難するようにしましょう。

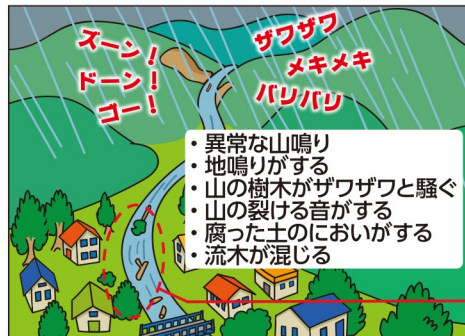
がけ崩れ

地中にしみ込んだ水分が土の抵抗力を弱め、雨や地震などの影響によって急激に斜面が崩れ落ちることをいいます。がけ崩れは突然起きるため、人家の近くで起きると逃げ遅れる人も多く、被害が発生する割合も高くなっています。



土石流

山腹・川底の石や土砂が長雨や集中豪雨などによって一気に下流へと押し流されることをいいます。その流れの速さは規模によって異なりますが、時速20～40kmという速度で一瞬のうちに人家や畑などを壊滅させてしまいます。



地すべり

斜面の一部あるいは全部が、地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する現象のことをいいます。一般的に移動土壌量が大きいので、甚大な被害を及ぼします。また一旦動き出すと、これを完全に停止させることは非常に困難です。



土砂災害の予防策

日ごろから避難する場所や道路などを確認しておきましょう。家の近くががけのある方は、がけの周辺を見回り、次のようなことを心がけましょう。



土砂災害特別警戒区域・土砂災害警戒区域について

土砂災害防止法に基づき群馬県が計画的に基礎調査を実施して、「土砂災害特別警戒区域」と「土砂災害警戒区域」の指定及び見直しを行っています。

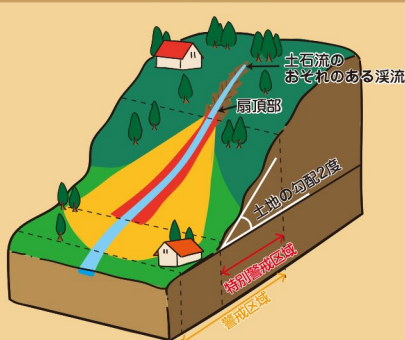
急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）



土砂災害警戒区域（イエローゾーン）

- ・傾斜度が30度以上で高さが5m以上の区域
- ・急傾斜地の上端から水平距離が10m以内の区域
- ・急傾斜地の下端から急傾斜地の高さの2倍（50mを超える場合は50m）以内の区域

土石流



土砂災害警戒区域（イエローゾーン）

- ・土石流の発生のおそれがある溪流において、扇頂部から下流で勾配が2度以上の区域

地すべり



土砂災害警戒区域（イエローゾーン）

- ・地すべり区域
- ・地すべり区域下端から、地すべりの地塊の長さに相当する距離（250mを超える場合は250m）の範囲内の区域

土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）

土砂災害が発生した場合に、建築物の損壊が生じ住民等の生命または身体に著しい危害が生ずるおそれがあると認められる区域（土石等の移動等により建築物に作用する力の大きさが、通常の建築物が土石等の移動に対して住民の生命または身体に著しい危害が生ずるおそれのある損壊を生ずることなく耐えることのできる力の大きさを上回る区域）

土砂災害から身を守るために

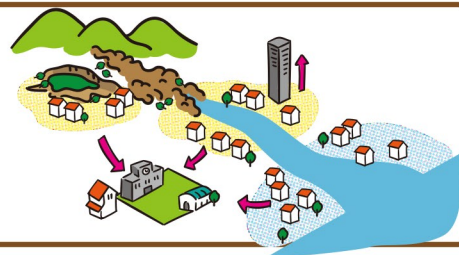
土砂災害は一瞬のうちに多くの人命や財産を奪う恐ろしい災害です。しかも、その発生を事前に予測することは非常に難しいです。土砂災害から身を守るためには、日ごろからの備えが大切です。

●住んでいる場所が「土砂災害警戒区域」かどうか確認！

自分の家が土砂災害のおそれのある地区にあるかどうか、確認しましょう。

また、避難の際にどこにどのように逃げるのか知っておくことが大事です。避難場所や避難経路を確認しましょう。

※ただし、土砂災害警戒区域等でなくても、土砂災害が発生する場合があります。付近に「がけ地」や「小さな沢」などがあれば注意しましょう。



●雨が降り出したら土砂災害警戒情報に注意！

雨が降り出したら、「土砂災害警戒情報」に注意しましょう。

土砂災害警戒情報は、大雨による土砂災害発生の危険度が高まったときに、町が避難指示などを発令する際の判断や住民の自主避難の参考となるよう、都道府県と気象庁が共同で発表する防災情報です。これは、市町村が警戒レベル4避難指示を発令する目安となる情報で、災害の切迫度が高まっていることを示しています。



●警戒レベル4で全員避難！

土砂災害警戒情報（警戒レベル4相当情報）が発表されたら、避難指示が発令されていなくても、土砂災害警戒判定メッシュ情報などを参考にし、家族・親戚や地域内の方々に声をかけあい、早めに近くの避難場所など、安全な場所に避難しましょう。特に、お年寄りや障がいのある人など避難に時間がかかる人は、移動時間を考えて早めに避難させることが大切です。夜中に大雨が予想される場合には、暗くなる前に避難することがより安全です。また、土砂災害の多くは木造の1階で被災しています。どうしても避難場所への避難が困難なときは、次善の策として、近くの頑丈な建物の2階以上に緊急避難するか、それも難しい場合は家の中でより安全な場所（がけから離れた部屋や2階など）に避難しましょう。



地震対策

地震災害とは？

地震による災害は、津波をはじめ、建物倒壊、火災の発生、土砂崩れ、液状化現象などがあります。建物の倒壊や土砂崩れなどによって道路が通れなくなる交通障害や、線路の安全確認により電車が動かなくなる場合もあります。また停電や都市ガスの停止、水道の断水が起こる場合もあり、電話やインターネットもつながりにくくなります。

地震の時の行動は？

地震の揺れを感じた場合や緊急地震速報を見聞きした場合は、あわてずにまずは身の安全を確保してください。そして落ち着いてテレビやラジオ、携帯電話やスマートフォンなどで正確な情報の把握に努めましょう。

地震発生

1~2分

最初の大きな揺れは約1分間

- 身の安全を確保する

揺れがおさまったら

- 火元を確認 火が出たら、落ち着いて初期消火
- 家族の安全を確認 倒れた家具の下敷きになっていないかを確認
- 靴をはく 家の中はガラスの破片が散乱。靴や厚手のスリッパをはく
- 避難するときは、屋根瓦の落下・ブロック塀の倒壊・自動販売機などの転倒に注意



3分

みんなの無事を確認 火災の発生を防ぐ

隣近所に 声をかけよう

- 要配慮者の安全確保
- 隣近所で助け合う
- 行方不明者はいないかの確認
- ケガ人はいないかの確認

出火防止 初期消火

- 消火器を使う
- 余震に注意
- 漏電・ガス漏れに注意 電気のブレーカーをおろす・ガスの元栓を閉める



5分

ラジオなどで正しい情報を

- 防災機関、自主防災組織の情報を確認
- デマにまどわされないようにする
- 避難時に車は極力使用しない
- 電話は緊急連絡を優先する



10分

数時間
3日

協力して消火活動、救出・救護活動を

- 水、食料は蓄えているものでまかなう
- 災害・被害情報の収集
- 壊れた家に入らない
- 近くの人救出・救護



屋内にいた場合

家の中

- 頭を保護しながら丈夫な机の下などに隠れる
- 火の確認はすみやかにする（コンセントやガスの元栓の処置も忘れずに）
- 乳幼児や病人、高齢者など災害弱者の安全を確保する
- 裸足で歩き回らないようにする（ガラスの破片などでケガをする）

大規模店舗や集客施設にいるとき

- 吊り下がっている照明などの下から避難する
- あわてて出口や階段に殺到しない

エレベーターに乗っているとき

- 最寄りの階で停止させて、すぐに降りる

屋外にいた場合

路上

- ブロック塀や自動販売機には近づかず、ビルの壁、看板や割れた窓ガラスなどの落下に注意する。頭をカバンなどで保護する

車を運転中

- あわてて急ハンドルや急ブレーキをかけず徐々に速度を落とす
- 避難するときは、キーはつけたまま、ドアロックもしない。車検証などの貴重品を忘れずに持ち出す

山やがけ付近にいるとき

- 落石やがけ崩れに注意し、できるだけその場から離れる

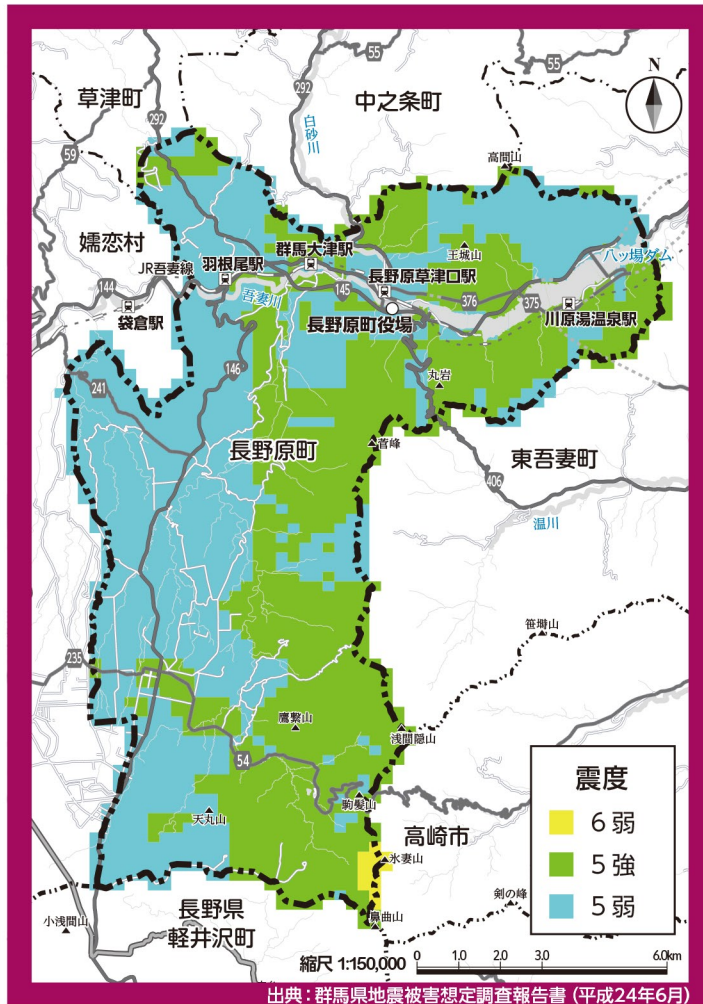


揺れやすさマップ

群馬県は地震防災対策として、現時点で最新の予測手法で被害予想調査を行っています。実際の震災では常に想定を超える可能性があるという意識を持ち、日ごろから大震災への備えをしておきましょう。

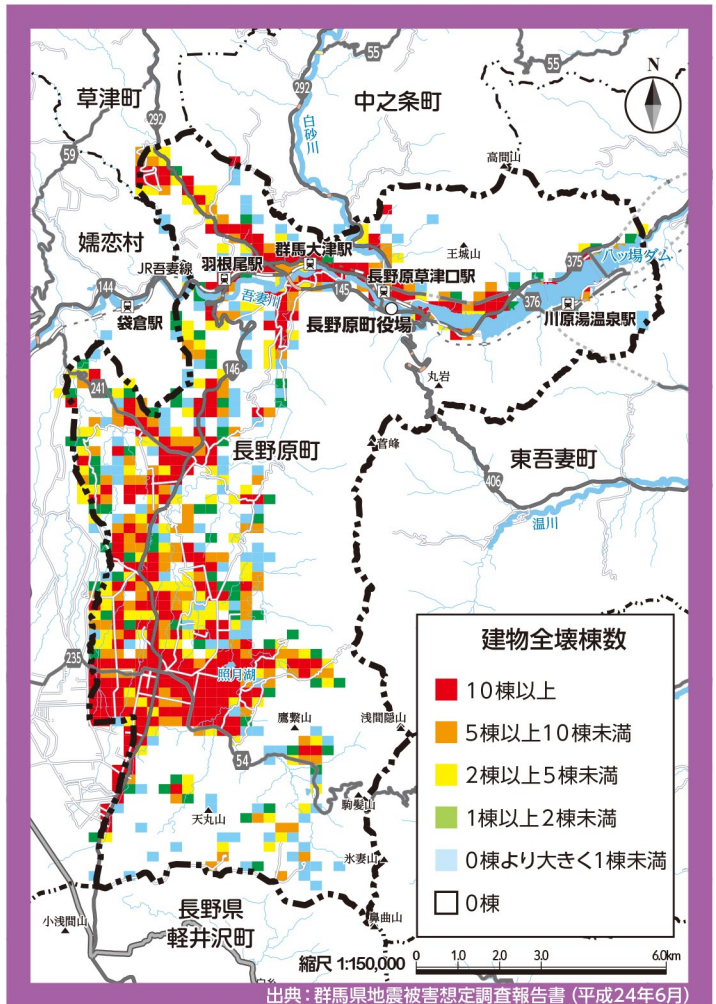
地震分布図

この地図は、群馬県が行った地震被害想定調査において、長野原町の被害が最も大きくなる関東平野北西縁断層帯地震が発生した場合の震度分布を250mメッシュで表示したものです。



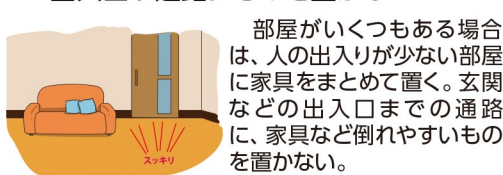
建物全壊棟数図

この地図は、群馬県が地表震度分布図の震度分布をもとに、構造別・建築年次別の建物データから倒壊被害の危険度を予測し250mメッシュで表示したものです。昭和56年5月31日以前の建物の割合が多い区域は、危険度が高く表示されます。



わが家の安全対策

●家の中に逃げ場としての安全な空間をつくる 出入口や通路にものを置かない



●寝室、子どもやお年寄りのいる部屋には家具を置かない



就寝中に地震に襲われると危険。子どもやお年寄り、病人などは逃げ遅れる可能性がある。枕元には靴、懐中電灯、笛などを入れた袋を用意する。倒れた家具が妨げとなって逃げ遅れる可能性があるので倒れそうな家具は置かない。



家の中の転倒落下を防ぐポイント

タンス・本棚

L字金具や支え棒などで固定する。二段重ねの場合はつなぎ目を金具でしっかり連結しておく。



食器棚

L字金具などで固定し、棚板には滑りにくい材質のシートやふきんなどを敷く。重い食器は下の方に置く。扉が開かないように止め金具をつける。



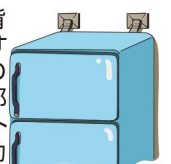
テレビ

できるだけ低い位置に固定しておく。家具の上はさける。



冷蔵庫

ベルトなどで背面と壁を固定する。背面上部のベルト取付け部分と壁とをベルトで連結すると効果が高くなる。



火山対策(浅間山)

火山について

火砕流

火口から噴出した高温の岩塊、火山灰、軽石などが高温のガスと融合し、それが一体となって地表を逆走する現象。

融雪型 火山泥流

雪が積もっている時期に高温の火砕流が発生すると雪が解け、土砂、火山灰等と一緒に、斜面を高速で流れ下る現象。

その他の 火山現象

地震・空振・噴石・火山灰・火山ガス・溶岩流・土石流など

浅間山では、極小規模の噴火、小～中規模の噴火、大規模の噴火の発生が想定されています。極小規模や小～中規模の噴火が発生すると、そのまま活動が沈静化することが多いですが、場合によっては大規模な噴火に発展することもあります。火山活動の状況に応じて「警戒が必要な範囲」と住民などの「とるべき防災対応」を5段階に区分しています。町からの情報にしたがって落ち着いて行動しましょう。



レベル (キーワード)	対象範囲	火山活動の状況	住民等の行動	名称
5 (避難)	居住地域及びそれより火口側	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫している状態にある。	危険な居住地域からの避難等が必要	噴火警報 (居住地域)
4 (高齢者等避難)	居住地域及びそれより火口側	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される(可能性が高まっている)。	警戒が必要な居住地域での高齢者等避難、要配慮者の避難等が必要	噴火警報 (居住地域)
3 (入山規制)	火口から居住地域近くまで	居住地域の近くまで重大な影響を及ぼす(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	通常の生活状況に応じて要配慮者の避難準備	噴火警報 (火口周辺) 又は 火口周辺警報
2 (火口周辺規制)	火口周辺	火口周辺に影響を及ぼす(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	通常の生活	噴火警報 (火口周辺) 又は 火口周辺警報
1 (活火山であることに留意)	火口周辺	火山活動は静穏。火山活動の状態によって、火口内で火山灰の噴出等が見られる(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)。	通常の生活	噴火予報

噴火レベル 4～5(噴火警報)

噴火警戒レベル4～5では、居住地域まで被害が及ぶ恐れがあるため、避難準備や避難をする必要があります。レベル4～5が発表された場合は、地元防災機関(町・警察・消防)の指示に従ってください。

噴火レベル 2～3(火口周辺警報)

噴火警戒レベル2～3では登山道の規制地点が変わります。規制範囲内では、噴火に伴い直接人命に危険が及ぶ火山現象が発生するおそれがあります。一時的に道路を規制することがあります。

日ごろの火山噴火対策

火山・防災情報に注意する

- 「火山に関する情報」等を日ごろからチェックしましょう。
- 防災行政無線やメール配信サービスなどの噴火に関する情報に注意しましょう。
- 迷信やSNSのデマに惑わされないようにしましょう。

噴火が起きたときのことを考える

- 浅間山ではどのような噴火災害が考えられるのか、知っておきましょう。
- 家族みんなで避難する場所を確認しておきましょう。

防災用品を準備する

- 小さな噴石にはヘルメット、降灰があるときはマスクやゴーグルが効果的です。

浅間山の噴煙を見る習慣をつける

- 「噴煙に色はついていないか、量は増えていないか」「火山ガス特有のにおい(卵が腐ったようなにおい)はしないか」などが目安となります。

小～中・大規模の噴火

小～中規模の噴火

これまでの小～中規模の噴火では、降灰や噴石、空振、ときには小規模な火砕流などの現象が発生しました。

小～中規模の噴火は、今後も起こりやすいと予想されます。噴火した場合、火口から4km以内では、大きな噴石が飛んでくる可能性があります。噴火時は危険ですので火口から4km以内に近づいてはいけません。噴火していないときでも、指定された登山道以外は立ち入り禁止です。

融雪型火山泥流

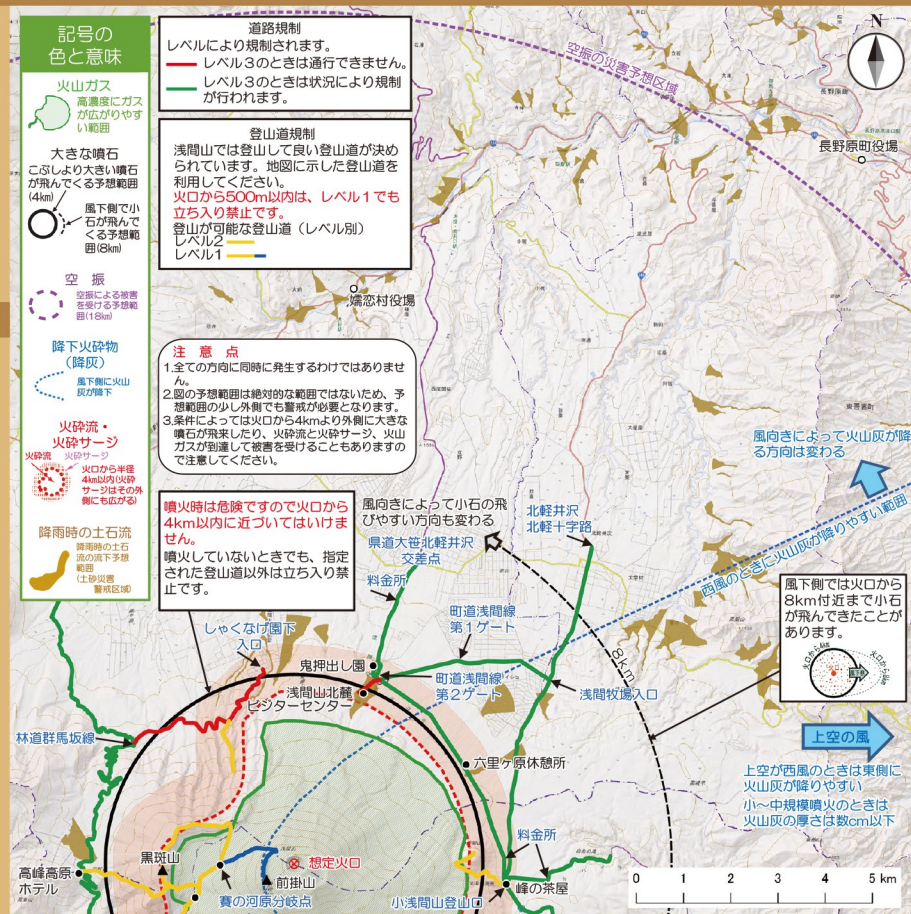
- ①噴火 高温の岩塊や軽石が噴出
- ②火砕流 数百度の高温 時速100km 近距離で流走
- ③融雪型火山泥流 雪がとけて土砂等と一緒に時速60km近い速度で流下

融雪型火山泥流からの避難に関する心得

- 沢筋や低地等危険度が高い地域では、**早めに避難**する。（自らの判断に基づく自主避難）
- 危険箇所を通らず**谷から離れ**、近くの**高台等**に避難する。
- 屋外に泥流が到達している場合又は**すぐそばまで迫っている場合**は、屋外には**出ず**建物の2階以上で避難する。
- 近くに高台等**高所がない場合は**、頑丈な建物の**高いところ（2階以上）**に避難する。



このハザードマップは **火口周辺警報（噴火警戒レベル2～3）**に相当します。



大規模の噴火

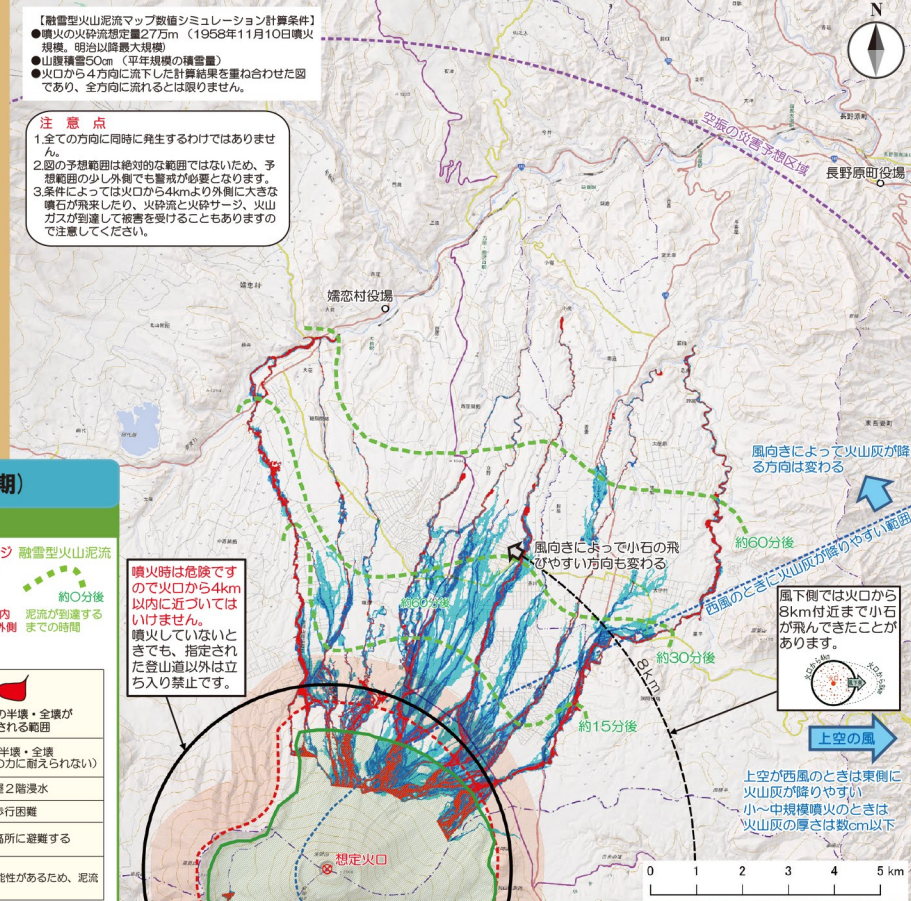
このハザードマップは **噴火警報（噴火警戒レベル4・5）※積雪期**に相当します。

これまで大規模噴火では大量の軽石や火山灰の降下、吾妻火砕流、鬼押し出し溶岩の流下が発生し、鎌原火砕流・岩屑雪崩では大きな被害を受けました。火山灰や軽石が風下側の地上に積もり、火山灰を吸い込んだ精密機械が故障したり、木造家屋は屋根に積もった火山灰・軽石の重さで倒壊したり、高熱によって火事になるおそれがあります。広域避難の必要がありますので、火砕流や火砕サージの影響を受ける可能性がある周囲では、事前に安全な場所へ避難する必要があります。

小～中規模噴火のハザードマップ（積雪期）

記号の色と意味

	火山ガス	大きな噴石	空振	降下火砕物（降灰）	火砕流と火砕サージ	融雪型火山泥流
	高濃度のガスが広がる範囲	火口より大きい噴石が飛んでくる予想範囲(4km) 風下側に小石が飛んでくる予想範囲(8km)	空振による被害を受ける予想範囲(18km)	風下側に火山灰が降下	火砕流 火砕サージ 火口から半径4km以内(火砕サージはその外側にも広がる)	融雪による被害を受ける予想範囲(約18km)
融雪型火山泥流（詳細）						
区分条件		床下浸水が想定される範囲	木造家屋の損壊と床上浸水が想定される範囲	木造家屋の半壊・全壊（建物に泥流の力に耐えられない）	木造家屋の半壊・全壊（建物に泥流の力に耐えられない）	
家屋被害	なし		家屋損壊	家屋半壊・全壊	家屋半壊・全壊	
浸水被害	床下浸水	床上浸水（家屋1階浸水）		家屋2階浸水		
歩行避難への影響	歩行可能	歩行困難	歩行困難	歩行困難		
避難行動	泥流が到達する前	高台等高所または丈夫な建物の2階以上に避難する	高台等高所または丈夫な建物の2階以上に避難する	建物の2階以上に避難する（泥流が家を突き破って家の中へ浸入してくる可能性があるため、泥流の反対側に避難する）	高台等高所に避難する	
	泥流が到達してしまっている場合					



火災対策

初期消火の3原則！1人で消せるだろうと考えず、隣近所に火事を知らせ、すみやかに119番通報を。初期消火で火事を消せなかったら、すばやく避難しましょう。

1 早く知らせる

- 「火事だ」と大声を出し、隣近所に援助を求める。声が出なければやかんなどを叩き、異変を知らせる。
- 小さな火でも119番に通報する。当事者は消火に当たり、近くの人に通報を頼む。



2 早く消火する

- 出火から3分以内が消火できる限度。
- 水や消火器だけで消そうと思わず、座布団で火を叩く、毛布で覆うなど手近のものを活用する。

火元別初期消火のコツ

油なべ

あわてて水をかけるのは厳禁。消火器がなければ濡らした大きめのタオルやシーツを手前からかけ、空気を遮断して消火を。

電気製品

いきなり水をかけると感電の危険が。まずコードをコンセントから抜いて（できればブレーカーも切る）消火を。

衣類

着衣に火がついたら転げまわって消すのも方法。髪の毛の場合なら衣類（化繊は避ける）やタオルなどを頭からかぶる。

浴室

浴室からの出火に気づいても、いきなり戸を開けるのは禁物。空気が室内に供給されて火勢が強まる危険がある。ガスの元栓を閉め、徐々に戸を開けて一気に消火を。

石油ストーブ

真上から一気に水をかけて消火（斜めにかけてと石油が飛び散って危険）。石油が流れて広がっていくようなら毛布などで覆い、その上から水をかけて消火を。

カーテン・ふすま

カーテンやふすまなどの立ち上がり面に火が燃え広がったら、もう余裕はない。火元を天井から遠ざけ、その上で消火を。

3 早く逃げる

- 天井に火が燃え移った場合は、すみやかに避難する。
- 避難するときは、燃えている部屋の窓やドアを閉めて空気を断つ。



消火器の使い方

粉末・強化液消火器の場合



自宅の火災予防

火災警報器の設置義務化

消防法の改正により、住宅用火災警報器の設置が義務付けられました。火災による死傷者を無くすためにも設置しましょう。

火災警報器の設置場所

寝室

すべての寝室（子ども部屋や高齢者の部屋など就寝に使われている場合は対象となります）への設置が必要です。

階段

寝室のある部屋の階段の天井などへの設置が必要です。

消火器のかまえ方

- 風上に回り風上から消す。火災にはまともに正面から立ち向かわないように。
- やや腰を落して姿勢をなるべく低く。熱や煙を避けるように構える。
- 燃え上がる炎や煙にまどわされずに燃えているものにノズルを向け、火元に向かって左右に振る。



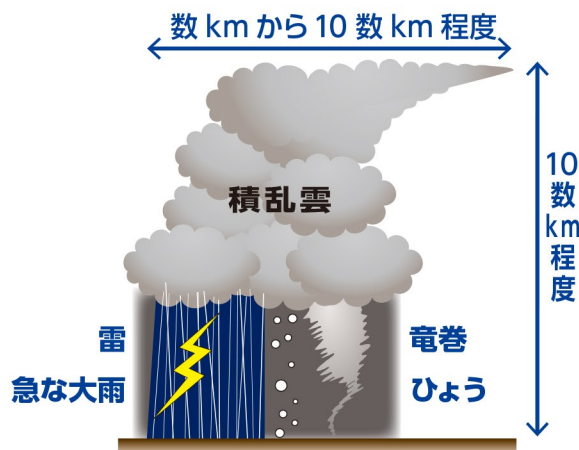
住宅内取付位置図



注意：住宅用火災警報器は電池式のもが主流です。電池の寿命は5年から10年とされていますので、早めの交換をお願いします。

竜巻対策

発達した積乱雲からは、竜巻、ダウンバースト、ガストフロントといった、激しい突風や雷をもたらす現象が発生します。竜巻は、積乱雲に伴う強い上昇気流により発生する激しい渦巻きで、多くの場合、漏斗(ろうと)状または柱状の雲を伴います。直径は数10～数100mで、数kmに渡って移動し、被害地域は帯状になる特徴があります。



積乱雲が近づくサイン

真っ黒い雲が近づいてきた

急に暗くなった

雷の音が聞こえてきた

急に冷たい風が吹いてきた

大粒の雨やひょうが降り出した

「竜巻」が間近に迫ったら…

いろいろな物が猛スピードで飛んできます！

屋外では

- ・頑丈な構造物の物陰に入って、身を小さくする
- ・物置や車庫、プレハブの中には入らない
- ・シャッターを閉める
- ・電柱や太い木には近づかない

屋内では

- ・窓から離れる
- ・窓やカーテンを閉める
- ・丈夫な机やテーブルの下に入るなど、身を小さくして頭を守る
- ・家の1階の窓の少ない部屋に移動する

竜巻に遭遇した人からは次のような声を聞きます。
このような場合には、あなたの身に危険が迫っています。

- ・雲の底から地上に伸びる漏斗(ろうと)状の雲を見た。
- ・飛散物が筒状に舞い上がるのを見た。
- ・ゴーという音がしたのでいつもと違うと感じた。
- ・気圧の変化で耳に異常を感じた。

竜巻注意情報(気象庁)

<http://www.jma.go.jp/jp/tatsumaki/>

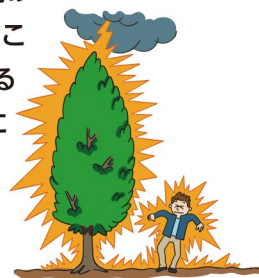


雷対策

雷は、大気中で大量の正負の電荷分離が起こり、放電する現象です。

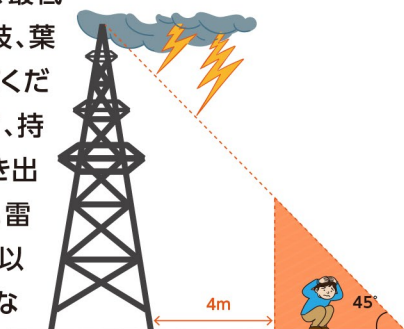
「雷」から身を守るには・・・

雷は、雷雲の位置次第で、海面、平野、山岳など場所を選ばずに落ちます。近くに高いものがあると、これを通して落ちる傾向があります。グラウンドやゴルフ場、屋外プール、堤防や砂浜、海上などの開けた場所や、山頂や尾根などの高いところなどでは、人に落雷しやすくなるので、できるだけ早く安全な空間に避難して下さい。鉄筋コンクリートの建物、自動車(オープンカーは不可)、バス、列車の内部は比較的安全な空間です。



安全な空間に避難できない場合は・・・

近くに安全な空間が無い場合は、電柱、煙突、鉄塔、建築物などの高い物体のてっぺんを45度以上の角度で見上げる範囲で、その物体から4m以上離れたところ(保護範囲)に退避します。高い木の近くは危険ですから、最低でも木の全ての幹、枝、葉から2m以上は離れてください。姿勢を低くして、持ち物は体より高く突き出さないようにします。雷の活動が止み、20分以上経過してから安全な空間へ移動します。



遠くで音がしたら
すでに危険な
状態です！
安全な場所へ
移動しましょう。



雷ナウキャスト(気象庁)

<https://www.jma.go.jp/bosai/nowc/>



雪害対策

大雪対策

大雪災害が発生した場合には公助だけでは対応が困難なことから、**自助・共助での取り組みが非常に重要**になります。まずは、家庭内や地域で大雪時の対応について話し合い、あらかじめ大雪に備えましょう。

車で外出する場合の備え

運転中に吹雪や地吹雪等により視界が悪くなったときや視界が真っ白になり何も見えない状況（ホワイトアウト）になった場合は、早めに停車帯やコンビニエンスストアなどへ移動しましょう。

雪道を運転する際には、スコップやバッテリーのブースターケーブル、スタック時のための牽引用ロープの他、事故などにより車に閉じ込められた場合に備え、防寒用にブランケットなども入れておくとう安心です。車内で救助を待つときには、マフラー周辺に雪が積もったままエンジンをかけると、排気ガスが車の中に入り一酸化炭素中毒の危険性が生じるので原則エンジンを切りましょう。

路面凍結に注意

信号交差点

信号交差点のある箇所では、車が発進や停止を繰り返すことによって、圧雪や凍結路面が摩擦熱で解けて、タイヤとの間に水滴ができるため、路面が非常に滑りやすくなる場合があります。

橋梁（橋げた）

橋梁区間では、ほかの区間と異なり夜間には橋の下からも熱が奪われるので、路面の温度が低下しやすく、ほかの路面が凍っていないくても橋の上だけは凍結していることがあります。



トンネルなどの出入口

トンネルなどの出入口は日陰になることが多く、局所的に路面が凍結している場合があります。周囲が雪景色の場合には、トンネルの中と外での明るさが極端に異なることで状況が見えにくくなることを踏まえ、トンネル出入口付近での突然の路面変化に備え、走行には注意しましょう。

冬道の歩き方

坂道や横断歩道、バスやタクシーの乗降場所は特に注意！！

重心をやや前に、なるべく両手をあげて体のバランスを安定させることで転倒を防ぐことができます。急に走ったり、歩く速度を変えるときは特に滑りやすくなるので気を付けましょう。

降り積もった雪よりも踏み固められて圧雪や氷となった道のほうが滑りやすくなっています。そのため、たくさんの人や車が通る場所は特に注意が必要です。スニーカーや革靴、ハイヒールは雪道で滑りやすいためとても危険です。雪道では、撥水性・防水性に優れており、底が軟らかいゴム製で深い溝がある滑りにくい靴を履くことが大切です。

大雪が降った場合

除雪作業の注意点

雪かきスコップなどの除雪用具を用意しましょう。また、作業中は転倒や屋根雪の落下に注意しましょう。県・町は、所管する幹線道路を中心に、除雪作業を行います。

町民の皆さんは、**自助・共助の精神に基づき自宅付近の除雪を行うなど通行の確保、孤立・閉じ込め状況の解消に協力してください。**ただし、個人敷地内も含め、**除雪した雪は事故やケガの元になりますので道路に出さないでください。**

落雪に注意

屋根の雪が解けはじめ、**大きなかたまりになって落下する場合があります。可能な限り屋根の雪を下ろすか、下に物を置かないようにしたり、通行者に注意を呼び掛ける表示をしましょう。**

歩行等通行中は足元に注意するとともに、頭上にも十分注意してください。



備蓄をしましょう

積雪により外出できなくなる場合に備え、水（1人1日3リットルが目安）、食糧、灯油等の備蓄を確認しましょう。特別な非常食に限らず、普段から購入しているものを少し多く買い置きすることで十分です（最低3日分・推奨7日分）。



外出は控えましょう

積雪時には不要不急の外出は極力控えてください。

自動車等により雪が踏み固められると除雪が遅れ、交通障害の原因となります。



地域で助け合おう

近所に1人暮らしの高齢者や障がいのある方がいる場合は、地域で協力して助け合いましょう。

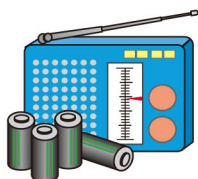


非常時持出品・備蓄品

非常時持出品(例)

いざというときすぐに持ち出せるように、日ごろから準備・点検しておきましょう。

携帯ラジオ



- ☐ ラジオ
- ☐ 電池(多めに用意)

救急医療品



- ☐ 救急セット
- ☐ 常備薬(持病の薬等)

感染症対策

- ☐ マスク
- ☐ 手指の消毒液
- ☐ 体温計

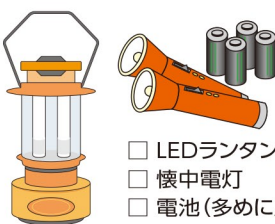
非常食品



火を通さないで
食べられるもの

- ☐ 飲料水
- ☐ 乾パン
- ☐ 缶詰
- ☐ アルファ米
- ☐ 飴・チョコなど

ライト類



- ☐ LEDランタン
- ☐ 懐中電灯
- ☐ 電池(多めに用意)

その他



- ☐ 現金(小銭多めに)
- ☐ ホイッスル(助けを呼ぶため)
- ☐ 着替え
- ☐ ウェットティッシュ
- ☐ 歯ブラシ

- ☐ 携帯電話の充電器
- ☐ タオル
- ☐ ラップフィルム
(止血や食器にかぶせて使う)
- ☐ 割りばし

- ☐ 紙皿・紙コップ
- ☐ 携帯トイレ
- ☐ 新聞紙
- ☐ ポリ袋
- ☐ 耳栓・アイマスク

各家庭で必要なもの

- ☐ 赤ちゃん用品(ミルク、離乳食、おむつ等)
- ☐ 生理用品
- ☐ コンタクトレンズ、めがね

- ☐ 入れ歯や補聴器
- ☐ リュックサック

非常時備蓄品(例)

災害復旧までの数日間(最低限3日、推奨7日)を生活できるようにしましょう。

飲料水



- ☐ 飲料水
(1人1日3リットルを目安に)
- ☐ 貯水したタンクなど

非常食品



- ☐ お米(アルファ米も便利)
- ☐ 缶詰・レトルト食品
- ☐ 梅干し・調味料など
- ☐ ドライフーズ・飴・チョコ
(菓子類など)

燃料



- ☐ 卓上コンロ
- ☐ ガスボンベ
- ☐ 固形燃料

その他



- ☐ 生活用水(風呂などに貯水)
- ☐ 毛布・寝袋・洗面用具など
- ☐ 調理器具(なべ・やかんなど)
- ☐ バケツ・各種アウトドア用品など
- ☐ 歯みがきセット・ひげそりなど

避難するときはこんな格好で

ヘルメット(防災ずきん)
をかぶる

軍手や手袋を
はめる

長そで・長ズボン
着用
燃えにくい木綿製
品が良い

非常時持出品はリュック
サックに入れて背負う

靴は底の厚い、はき慣れた
ものをはく

帰宅困難に備えよう

昼間、大地震が発生した場合、交通機関の途絶によって自宅に戻れない「帰宅困難者」になる可能性があります。勤務先や学校から徒歩で帰宅することを想定し、日ごろから準備をしておきましょう。

防災グッズを用意する

携帯ラジオ、ヘルメット(防災ずきん)、スニーカー、非常食品、懐中電灯、革手袋、地図、寒暖対策用品など。

帰宅地図を用意する

災害の状況によっては、道路が通行不能になる場合もあるので、複数の帰宅ルートを決めておくとういでしょう。

家族との連絡方法を決めておく

地震が発生すると、家族や親類とは簡単に連絡をとることができません。事前に以下のような項目に関して、家族全員で確認しておくことが重要です。

- ☐ 災害時の安否確認の方法
- ☐ 家族の集合場所
- ☐ 徒歩帰宅する場合のルート



わが家の「緊急・救急情報」防災メモ

非常時・緊急時に連絡してほしい方など、非常時・緊急時に活用してもらいたいわが家の情報です。
災害時に救助の方や、緊急時に救急隊・医療機関などに情報を提供します。

わが家の 避難先	土砂災害・洪水時	地震時
家族が離れて いる時の 集合場所	土砂災害・洪水時	地震時

氏名	連絡先	会社・学校	血液型	かかりつけ医・常備薬

【メモ】※知ってほしい情報(介護情報・救急隊員への伝言など)をご自由にお書きください。

緊急ダイヤル

消防へ火事・救急・
救助の連絡

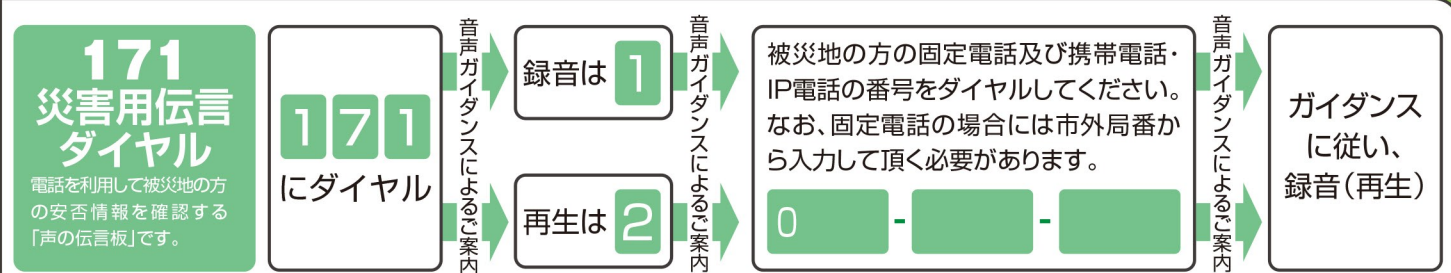
119

警察へ事件・
事故の連絡

110

あなたの無事を伝えましょう

体験利用日:「毎月1日及び15日」、「正月三が日」、「防災週間」、「防災とボランティア週間」



災害用伝言板(パソコン・スマホ用)



発行 長野原町

総務課 総務係 TEL 0279-82-2244 FAX 0279-82-3115

「この地図は、長野原町都市計画図(縮尺1/2,500)を使用し、調整したものです。」

「測量法に基づく国土地理院長承認(使用) R 2JHs 293-503号」

※使用ピクトグラム…「JIS Z8210」洪水/内水氾濫「土石流」「崖崩れ・地滑り」「大規模な火災」「鉄道/鉄道駅」

令和4年1月発行